

「重機で作業中、被災者の遺体を見つけた時の感触が忘れられない」これは、東日本大震災の時に地元自治体の要請に応じて復旧作業にあたった建設会社の作業員の言葉

ナビゲーター

です。大規模災害においては、復旧作業中に被災者の遺体を発見することは稀なことではなく、その際の動揺は大きく、その後の心理的反応に長期間苦しめられることもありま

す。職務を通してトラウマを引

◆ 40 ◆

働く人と組織

働きやすさの獲得と働きがいの創出

き起すような出来事や、被災者に接することで生じるストレスを「惨事ストレス」といいます。これまでは人命救助や捜索活動にあたる消防士、警察官、自衛官らが惨事ストレスにさらされるとされ、惨事ストレス対策のための心理教育を行うことが推奨されてきました。しかし東日本大震災では、復旧作業にあたる土木業者や自治体職員、ボランティアなどの支援者が被災地の悲惨な現状を目の当たりにして心理的な問題を抱えたり、先が見えない復旧復興活動の中で、心身が疲弊してこころの病に陥ったり、自殺

支援者支援の仕組みづくりを

を図ったりするケースが報告されています。支援者のみならず、支援者のこころのケアも重要な課題となつていま

特に、被災地の自治体は、災害直後から長期にわたって被災者を多方面から支援する重要な役割を担っており、自らも被災しながら災害対応業務を行う自治体職員のストレスには計り知れないものがあります。例えば、①災害直後、家族

と連絡が取れない中での業務遂行②家族を失い、家を失つても、被災者としてふるまえない③現場から逃げたくても逃げられない④衆人環視の中

での感情を封印した業務遂行⑤遺体安置所での身元確認⑥不眠不休の連続勤務―など、幾重にも重なる困難な状況の中での業務遂行が求められます。また、復旧・復興期に入ると被災者のストレスが、災害

スへと大きく移行します。災害直後の避難所は平等のルールに基づいて営まれますが、復旧・復興期に入ると被災者の境遇の差や生活再建の差が明らかになり、生活再建の過程でさまざまな困難に直面し、自助、共助、公助の限界を感じるようになります。自治体職員が被災者の不安、苦情や不満、怒りの受け手になることも大きなストレスとなります。

現在、新型コロナウイルス

感染対応の長期化により、医療従事者や感染症対策にあたる自治体職員のストレスが限界に達しているという報道が散見されます。エールを送って元気づけることも効果のある支援ですが、支援者支援の視点から、ニーズに基づいた具体的な支援を提供したり、こころのケアを提供する仕組みをつくることも重要であると考えます。

【日本産業カウンセラー協会 中部支部 副支部長 産業カウンセラー キャリアコンサルタント WHO版PFA 指導者 清水達也】
(火曜日に掲載)

